トピックス
1. 播州日誌
2. 南国土佐を後にして　第 20 回

福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福 留　　章

龍　馬　通　信

No. 76
2024 年 4 月号

清明～穀雨の候　春愁（しゅんしゅう）　春は来たけれど

緑が日に日に濃さを増し
清々しい空気が明るく輝く季節
生きるものに平等に
時は巡り　季節は移ろう
出会いと別れの季節
別れの悲しさを
新しい出会いが癒してくれる
戸惑いながら
希望に胸を膨らませて
初々しい人たちが　新生活を始める

寒の戻りを繰り返しながら
春は確実にやってきた
サクラの開花宣言　桜前線の北上
コロナから解き放たれた人々
それぞれの桜の名所に
歓声が上がり　渦を巻く

老若男女　破顔一笑　春を満喫
平和で幸せな風景が広がり
しばし時を忘れさせる

春の夕暮れは　もの憂く　もの悲しい
古人はそれを「春愁（しゅんしゅう）」と詠んだ

春の憂い　「春愁」
今　世界は激動の中に揺れ動く
それは海上に浮かぶ
ブイの　宿命（さだめ）のように
浮いては沈み　沈んでは浮き
波乱の波に　翻弄される
死と隣り合わせの日常

銃口は誰のために
誰を狙う
砲弾の先にある　絶望と涙
兵士たちよ
悲しくはないか　辛くはないか
何のために人を殺め　人を傷つけるのか

凍りつくような　鉄の心が
引き金を引く

終わりの見えない戦争
流血　死　怨念　報復

民主主義の未来は不透明
極右　全体主義　強権主義の台頭
プーチンは　核使用を示唆し脅迫
犯罪者のトランプが
アメリカの大統領に
アメリカファーストは
世界の勢力地図を　一変させる
ウクライナは苦境に陥り
ガザは　飢餓と無差別攻撃の危機に
さらされている

ウクライナとパレスチナに
春はまだ遠い

播州日誌

吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はあったりなかったりする。野良猫生活が長くなって、もうすっかり名前のことは忘れていた。あいつは俺のことを「ミックス」と呼んでいる。俺が三毛猫だからだろう。相変わらずあいつは元気で、判を押したように 6 時過ぎに天川東公園の花壇のあるサークル状のコーナーにやってくる。俺と顔を合わすのは週に 1～2 回のことだが、とにかく元気な爺だ。深呼吸を繰り返し、ベンチに上がったり下りたり、ゴルフの素振りのようなこともしている。まあ感心するのは最後の腕たせ伏せ、50 回だから迫力がある。

サークルをくるくる回りながら、口の中でぶつぶつつぶやいている。最近は特に日本の政治家のどうしようもない体たらく。そうだよな確定申告の時期に、国会の政倫審では裏金問題で、説明責任がどうだこうだと堂々巡りの審議を繰り返している。観客席の国民ももうあきらめきっている、政権与党がこれでは国の将来が危惧される。能登の復興も遅々として進まない。総力を結集してという言葉が空虚に響く。何か的外れなことばかりだ。大谷選手の水原通訳。お前なにすんねん。みんなの夢を壊すようなことすんな。大金を持つ者にはそれなりの覚悟がいる。金は魔物、有象無象の誘惑が押し寄せる。覚悟のないものが大金を持ってはいけない。

一通りのストレッチを終えて、あいつが公園を出ていく。今日は随分つぶやいていたな。
猫嫌いのあいつは、決して俺に触ることはない。ミックス、さいならとたまに挨拶していくが、俺は知らん顔をしている。あいつなんかと思うが、妙に気になるやつでもある。まあ元気でなと送る。とりあえず元気でいて欲しいと思う。さあ、朝飯とするか・・。

２０２４．３．２３

サプリメント天国への警鐘　　小林製薬紅麹事件

情報氾濫の時代と言われて久しい。地上波だけではなく BS や新聞の全面広告も含めればサプリメントの情報はまるで洪水のようだ。高齢者ともなれば体中に、痛みや不安を抱えている。その健康志向に目をつけて、各メーカーはいろんな症状に効果ありという商品を市場に投入している。まさに日本はサプリメント王国。多くの人が複数のサプリメントを日常的に服用している。

１月 15 日、医師から小林製薬に対して、同社の「紅麹コレステヘルプ」を常用した人に腎機能障害が発生しているとの通報があった。サプリメントと腎機能障害の因果関係が不明ということで公表をしなかった。その後死者も出たということで３月 22 日になって事実関係（死亡者発生）を公表。後手に回った対応は、すでに死者が出ている状況から、批判されて当然だと思う。該当する商品については販売中止、商品回収に着手した。同社は自ら販売する他、170 社に原料として紅麹を販売。30 社ほどはすぐに反応して回収などに着手したが他社は事件の推移を見守っている状況。多くの会社が、提供された紅麹を原料として商品を開発、販売している状況か

ら、被害は確実に拡大の方向に向かっている。

社会的に不安が広がっており、他の機能性表示食品への不信感も高まり、もう社会的問題となっている。３月29日現在、死者５名入院114名通院希望800名、相談件数は12000件に達している。同社は原因物質として青カビ由来の「プベルル酸」を検出したと発表、プベルル酸には毒性があり、腎臓への影響は不明。国の機関によるサンプルの検証が開始されたが原因の特定は難しいと言われている。

事件の確実な拡大を考えると、この事件は氷山の一角である。機能性表示食品の販売している会社は1700社以上もある。その存在からサプリメントの過剰摂取や副作用の身体への影響が懸念される。健康増進のサプリメントが一方で体に有害に働いているとすれば由々しき問題である。

機能性表示食品は特定保健用食品（トクホ）と違って、消費者庁への情報の提供届け出だけで販売・表示が可能となる。いわば公の検証を得ていない、つまり科学的根拠のない商品ということになる。トクホが厳しい検証・審査を経て世に出るのとは違って、あいまいな玉石混淆の商品が市場に溢れる。国民の選択肢を増やすために機能性表示食品の制度を作った国は言ってみれば、責任回避の安易な制度設計に終始し、後の検証を怠ったと言って過言ではない。

高齢者は衰えていく体をサポートするために身を削るようにして高額のサプリメントを購入し服用している。過大な広告、きれいなパッケージ、初回限定のサービスなどの誘惑に負けないように。過剰摂取をやめ慎重に商品を選択することが大切だ。

国は機能性表示食品の制度を抜本的に見直し、単に選択肢を増やすという安易な考えを捨て、国民が安心して服用することが出来る、科学的根拠に基づいた良品に限って販売・表示を許可するという原点に立ち戻る必要がある。

本稿を書いている間にも被害拡大は続いており、サプリメントの氾濫は続いている。

第10回　　社労士　　野口　亮　がゆく

三寒四温。日に日に春めいてきた。ウオーキングでも吐く息が、乳白色、白色、透明と変化して最近は、目に見えない程になった。4月に入るとまずSRの年度更新が始まる。社労士にとって1年中で一番忙しい季節を迎える。年中行事のようなもので、毎年やっていると手馴れては来るが、IT化の部分で戸惑うこともある。

執務室で労災の報告書を見ている時、携帯に直接電話が入る。ある児童養護施設の事務長。

うつ状態からうつ病を発症した職員の休職についての問い合わせ。

①求職理由②休職期間及び求職の始期③休職期間中の療養専念義務④休職期間中（1か月ごとに）状況報告義務⑤休職期間の満了時の措置⑥復職の条件など。主要なポイントを説明する。すでに二回目の休職期間が終わっており、その終期が2月29日。その後も期間中も連絡ない状態。社会保険料の個人負担分の入金もないとのこと。復職の意思もないと思われることから、速やかに退職手続きに入るよう勧めた。就業規則の根拠条文は、休職期間満了時に休職理由である疾病の治癒が認められないこと。満了時原職復帰できないときは自然退職とするという二つの規定。うつ病の多発に伴って、休職の事例が多くなっている。心の病だけに発症と治癒の見定めが難しい。

人一人の就業に関するだけに心に痛みを感じるが、労務管理上やむを得ないと判断した。

飲みかけのコーヒーを飲む。もうすっかり冷めていた。

～南国土佐を後にして～

第 20 回　「東京編」　浅草ロック

貧乏学生にとって浅草という街は、天国のような場所だった。特にロック「浅草６区」は遊びと時間つぶしにはもってこいの街。仲見世は当時から人通りが多く賑わっていた。正式には金龍山浅草寺という立派なお寺で、聖観音宗の本山。ご本尊は聖観世音菩薩。参詣者の中でよく柏手を打っている人がいる。同じ場所に浅草神社もあるのでややこしい。正式には「南無観世音大菩薩」と唱えるのが正解。総武線の浅草橋駅で降りて、都営地下鉄に乗り換え２駅ぐらいで「浅草」に到着する。

最初の頃は参詣もしていたが目的が遊びなので、その足でロックへ直行する。映画館や遊技場（パチンコ）、大衆演技場、寄席、ヌード劇場、大衆食堂などがひしめいていた。田舎者の私には眩しいほどの光景だったが何度も行っていると慣れてきてわが庭のようになった。魅力的だが怖い街でもあった。その道の人たちも多くいた。

映画館で映画を見ることが多かった。学生割引があって３本立てで 200 円ぐらいだったと思う。正直言って夏の暑い季節には、最高の避暑地で映画３本を見て 200 円は格安だった。日活ロマンポルノもよく見た。最初の頃はパートカラーで、画面が佳境に入るとそこだけカラーになり、そうでない場面は白黒となる。佳境に入るという意味については、読者の想像にお任せする。要するに白黒の場面は適当にみて、中には新聞を読んでいる人もいる。３本も見ればもう頭もぼんやりしてくる。しっかりと娯楽にはなった。

倍以上の料金にはなるが、学生割引もあって何とか入れるところがあった。有名な浅草ロック座で、コント 55 号や世界のたけしなど多くのタレントが、修行のため前座で出演していたことで有名なヌード劇場。ここに入るのは少し勇気が要った。入ろうかどうしようか劇場の前を行ったり来たり。胸の鼓動が激しくなる。意を決して入る。薄暗い場内はたばこの煙でむせるような雰囲気。ステージだけが異常に明るく照らし出されて若くてきれいな人がゆっくりと踊りながら、脱衣していく。多感な私はもうそれだけで赤面していた。ワンステージ６～７人の出演者が和装・洋装で演技する。当時は風営法で露出はここまでといった規制があってオールヌードではなかった。それでも観客の目はステージに釘づけ。場内は異様な興奮が漂い、出演者の濃い目の脂粉のにおいが鼻を刺激する。私は踊りながら前に出てくる「ヘソ」と呼ばれる円形のステージの端に座っていた。

客席はほぼ満席で、私よりは年配のおじさんが多かった。４番目の踊り子さんが私を指さして、ステージの上に上がれと言う。危険を察知した私は身構えて動かない。客席の「あがれ、あがれ」の連呼にも動ぜず身を固くしていた。しょうがないねえ、じゃ、いいものを見せてあげると言って、私を立たせたままでひらひらの赤いスカートを頭からかぶせてくれた。くれたというべきかどうかはともかく、成り行き任せではあったが、スカートの中は別世界。甘い香りがして、股間のバタフライだけが記憶に残った。ほんの数分間のことであったと思う。劇場を出てからもその光景が頭から離れず、消えては浮かんだ。その懊悩は１週間程度続いた。

遊ぶことに事欠かない浅草ロック。今から考えれば、昭和の時代を凝縮したような街で、面白くて怖くて安くて楽しいそんな街だった。高度経済成長期の産物でもあった。学生時代は足しげく通った。断っておくがほとんどは映画館で新作旧作、たまにパートカラーを楽しんだ。食べ物も安く、流石に学生割引はなかったが、親子丼やカツどん、ざるそばにラーメン、うどんに寿司、和洋中全部そろっていた。欠食気味の私には、たいしたご馳走だった。

浅草ロック、その名の響きは今でも懐かしく、わが青春の１ページを鮮明に飾るものである。

（文中、不適切な表現がありましたことを、お詫び申し上げます。）